

# 九世紀末の桜花詩

## — 和歌との交渉をめぐる —

梁青 (厦門大学 / 博報財団招聘研究員)

【キーワード】 九世紀末、日本漢詩、和歌、桜花

### 0. はじめに

桜は春を象徴する花として日本人には馴染みが深く、『古事記』や『日本書紀』に始まり現代まで文学にさまざまな形で取り上げられてきた。桜が詠み込まれた日本漢詩は『懷風藻』と勅撰三集に現れはじめたが、六朝・初唐詩の影響を多く受けていることが先行研究によって明らかになった。小島憲之氏は平安初頭の桜花詩が中国の桃や梅の花などの漢詩表現に学ぶことが多いとし、神谷かをる氏も小島氏を承けて、桜が紅色で表現されているのは中国詩の影響であると指摘している(小島 1979、神谷 1991)。

九世紀後半以後、日本漢詩はいよいよ爛熟期を迎えるようになる。そして、国風意識の高まりに伴って、日本漢詩の和歌化も現れはじめた。島田忠臣・菅原道真をはじめとする文人たちは、中国詩の模倣と追隨にとどまらず、桜を日本を代表するものであると強く意識しながら、桜に関する和歌表現を漢詩に取り入れて新たな展開を目指そうとしていた。奈良・平安初期の桜花詩についてはこれまで数多くの研究がなされてきたが、九世紀末の桜花詩における和歌的表現については、ほとんど検討されていない。そこで、本論では、九世紀末の日本漢詩人たちがいかに桜に関する和歌の表現・発想を自らの詩作に利用し、独特の漢詩表現を切り拓いていったのかを検討することによって、漢風讚美時代から国風復興時代にかけての和漢交渉の様態を浮き彫りにしてみたい<sup>1</sup>。

### 1. 九世紀前半までの桜花詩

『万葉集』には桜の花を詠んだ歌が41首ある。一方、日本漢詩では、『懷風藻』から勅撰三集にかけて、「桜」は僅かしか詠まれていない。

① 葉緑園柳月、花紅山桜春。

雲間頌皇沢、日下沐芳塵。

(『懷風藻』42・采女比良夫・五言、春日侍宴、応詔)

② 松煙双吐翠、桜柳分含新。

(『懷風藻』69・長屋王・五言、初春於作宝楼置酒)

③ 昔在幽岩下、光華照四方。

忽逢攀折客、含笑亘三陽。

送氣時多少、垂陰復短長。

1 本論文は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科提出の博士論文一部に加筆修正を行ったものである。

如何此一物、擅<sub>二</sub>美九春場<sub>一</sub>。

(『凌雲集』2・平城天皇・賦<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>)

④柳葉依<sub>レ</sub>糸緑、桜花払<sub>レ</sub>舞紅。

同茲霑<sub>二</sub>德寓<sub>一</sub>、具醉也融融。

(『凌雲集』36・賀陽豊年・三月三日侍宴応詔)

⑤早花春稍杪、桜樹乃舒<sub>レ</sub>榮。

独抱<sub>二</sub>後<sub>レ</sub>時歎<sub>一</sub>、還開<sub>二</sub>佇<sub>レ</sub>節英<sub>一</sub>。

風前香自遠、日下色逾明。

試賦<sub>二</sub>臨年蓊<sub>一</sub>、仙齡幾箇迎。

(『経国集』雑詠・115・賀陽豊年・五言詠<sub>レ</sub>桜)

桜花詩は宮廷詩宴で詠まれ始め、「紅」「光華」などの語を用いて、桜の爛漫と咲いているさまを表現している。『懐風藻』において、桜は柳とともに春を代表する景物として詠まれているが、平安初期になると、平城天皇の「賦桜花」とあるように、詩題そのものも日本化したのである。

弘仁三年(812)二月十二日、嵯峨天皇は神泉苑に幸し、花樹を賞で文人に詩を賦せしめた。『日本後紀』(嵯峨天皇・弘仁三年二月十二日条)に「辛丑。幸<sub>二</sub>神泉苑<sub>一</sub>。覽<sub>二</sub>花樹<sub>一</sub>。令<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>賦<sub>レ</sub>詩。花宴之節始<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>此矣」と記すように、花宴はこれより後頻繁に開催されている(山田1941)。

(天長)八年二月乙酉。天子於<sub>二</sub>掖庭曲宴<sub>一</sub>。翫<sub>二</sub>殿前桜華<sub>一</sub>也。…特喚<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>。

令<sub>レ</sub>賦<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>。

(『類聚国史』卷三十二・天皇遊宴・淳和天皇条)

三日己亥。鸞輿幸<sub>二</sub>大臣藤原朝臣良相西京第<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>。喚<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>賦<sub>二</sub>百花亭詩<sub>一</sub>。

(『三代実録』清和天皇・貞観八年三月廿三日条)

閏三月丙午朔。鸞輿幸<sub>二</sub>太政大臣東京染殿第<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>。…喚<sub>二</sub>能属<sub>レ</sub>文者数人<sub>一</sub>。

賦<sub>二</sub>落花無数雪<sub>一</sub>。

(『三代実録』清和天皇・貞観八年閏三月一日)

とあるように、平安初期の桜花宴や観桜行幸において、桜花の応制詩が数多く詠まれている<sup>2</sup>。『古事談』巻六の「南殿ノ桜橘ノ樹ノ事」によれば、仁明朝の頃、紫宸殿の前の梅が桜へと植え替えられたのである。『万葉集』で詠まれている一番多い花は中国から渡来した梅である。『古今集』になると、春の部の「花」といえば、殆ど「桜」を指すという観念が定着していき、桜が梅に代わって花の王座を得ていった。仁明朝において、唐風文化の隆盛は終わりを告げ、和歌に復活の曙が訪れる。梅の花から桜の花への植え替えは、漢詩文全盛時代から和歌復興時代への移行を象徴している。

しかし、これまで見てきたように、九世紀前半の桜花詩には、和歌における桜の独特な

2 詩そのものは殆ど伝わらない。

詠み方は殆ど見当たらない。前に述べたように、小島憲之氏は平安初頭の桜花詩が中国の桃や梅の花などの漢詩表現に学んだと指摘する(小島1979)。例えば、③の「含<sub>レ</sub>笑<sub>亅</sub>亅<sub>三</sub>陽<sub>一</sub>」と⑤の「風前香自遠」の発想は、

歳去无<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>忽憔悴、時来含<sub>レ</sub>笑<sub>一</sub>吐<sub>レ</sub>氛氲<sub>一</sub>。

(『全唐詩』初唐・李嶠・侍宴<sub>一</sub>桃花園<sub>一</sub>咏<sub>一</sub>桃花<sub>一</sub>応<sub>レ</sub>制)

向<sub>レ</sub>日分<sub>二</sub>千笑<sub>一</sub>、迎<sub>レ</sub>風共<sub>二</sub>一香<sub>一</sub>。

(『全唐詩』初唐・唐太宗・詠<sub>一</sub>桃)

などの桃花詩に求めることができる。「葉緑園柳月、花紅山桜春」における「葉緑・花紅」の対語は、

葉翠如<sub>二</sub>新翦<sub>一</sub>、花紅似<sub>二</sub>故栽<sub>一</sub>。

(『芸文類聚』卷第八十六・果部上・石榴・梁元帝・賦<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>咏<sub>一</sub>石榴詩<sub>一</sub>)

などの石榴詩より摂取したものと考えてよいであろう。①②④における「柳・桜」の組み合わせは六朝・初唐詩には見い出せないが、「河柳低未<sub>レ</sub>举、山桃落已芬」(『芸文類聚』卷二・天部下・雨・梁・劉苞・望<sub>一</sub>夕雨<sub>一</sub>詩)「庭梅飄<sub>一</sub>早素<sub>一</sub>、檐柳变<sub>一</sub>初黄<sub>一</sub>」(『初学記』十四・礼部下・隋・劉端・和<sub>一</sub>初春宴東堂应令<sub>一</sub>詩)のような中国詩はその生成に深く寄与していると思われる。また、⑤の「風前の香自づからに遠し」のように、和歌ではあまり詠まない「桜の香」がかえって多く詠まれる(後藤1983)。それは桃の花や梅の花の香りを詠む六朝・初唐詩の表現をそのまま踏襲した結果であろう<sup>3</sup>。

ちなみに、中国にも「桜」を詠んだ漢詩はある<sup>4</sup>。『本朝一人一首』(卷二・67)においては、桜花と中国における桜桃との混同について言及している。

林子曰はく、桜花の詩、中朝に在っては聞くこと罕なり、偶伝ふる者、或いは桜桃と相混じ、或いは其实を詠ず。本朝倭歌家者流殊に之を賞し、以て百花の冠と為。遂に其名を斥さず、猶洛の牡丹、蜀の海棠のごとし。

だが、市井桃子氏の詳細な考証によると、中国詩においては、確かに桜桃の花よりもその果実が表現史上先行したが、六朝に桜花詩が現れ、中唐において桜花詠の表現や主題が大きく変容した(市川2007)。中国の桜花詩を取り上げてみると、

3 『芸文類聚』の「河柳低未举、山桃落已芬」(卷二・天部下・雨・梁・劉苞・望夕雨詩)「早梅香野径、清澗響丘琴」(卷三十六・人部二十・隋・王由礼・賦得岩穴無結構詩)において、「桃の花の香り」「梅の花の香り」が詠まれている。

4 中国詩に詠まれた「桜」「紅桜」「山桜」は殆どが桜桃花を指しており、日本の「桜」と品種が異なるとされる。江戸時代の本草学者、儒学者貝原益軒は『大和本草』(有明書房、1978年5月、4頁)で、「文選沈休文早発定山詩山桜発欲然註果木名。花朱色如火欲然也王荊公詩曰山桜抱石映松枝司馬温公ノ詩二曰紅桜零落杏花開是中華ニ桜ト云ハ朱花ナリ日本ノ桜ト云物ハ中華ニ無之」(卷十二・木下・桜)と述べる。

澗水初流<sub>レ</sub>碧、山桜早発<sub>レ</sub>紅。

(『芸文類聚』卷三・歳時上・春・梁・蕭瑱・春日貽<sub>二</sub>劉孝綽<sub>一</sub>)  
初桜動時艶、擅<sub>レ</sub>藻燦<sub>二</sub>輝芳<sub>一</sub>。細葉未<sub>二</sub>開萼<sub>一</sub>、紅葩已発光。

(『初学記』卷二十八・果木部・宋・王僧達)

といった詩は前掲の①「葉緑園柳月、花紅山桜春」と③「光華照四方」の詩境に近い。言い換えれば、九世紀前半までの日本桜花詩には個性的な表現がなかなか見つからないのである。

## 2. 九世紀後半の桜花詩に見られる和歌的趣向

花の宴が重要な年中行事化してくるとともに、「桜花」も詩材として日本漢詩に定着していく。特に宇多朝では、桜花宴が毎年開かれていたようである<sup>5</sup>。頻繁に催された桜花宴や観桜行幸は、日本漢詩と和歌の交流の契機となる。貞観八年(866)閏三月、源融は詩題「落花無数雪」<sup>6</sup>を踏まえて、

貞観御時、弓のわざつかうまつりけるに  
けふ桜しづくにわが身いざぬれむ香ごめにさそふ風の来ぬ間に

(『後撰集』卷二・春中・56・河原左大臣)

といった和歌を作った。つまり詩歌同題の詠進である。また、寛平七年(895)二月の公宴(『日本紀略』に「公宴。賦<sub>二</sub>春翫桜花之詩<sub>一</sub>」とある)において、

寛平御時、桜の花の宴ありけるに、雨の降り侍りければ  
春雨の花の枝より流来ばなほこそ濡れめ香もやうつと

(『後撰集』卷三・春下・110・藤原敏行)

といった和歌が宴の余興として詠まれた。余興とはいえ、和歌が徐々に表舞台に登場する機会を得てきたのである。その一方で、桜の和歌表現も次第に日本漢詩の表現体系の中に滲透していく。

### 2.1. 早く散る桜を惜しむ

島田忠臣の『田氏家集』には、桜の盛りの短さを詠んだ漢詩が二首ある。

宿昔猶枯木、宿昔枯木のごとし  
迎晨一半紅、<sup>あした</sup>晨を迎へて 一半<sup>くれなる</sup>紅なり  
国香知有異、国香 異なること有るを知る

5 『菅家文草』384 番「春翫桜花、応制一首」の序文に「我君每遇春日、每及花時、惜紅艶以叙愴情、翫薰香以廻恩盼」と見える。

6 『三代実録』貞観八年閏三月一日条には「鸞輿幸太政大臣東京染殿第。観桜花。…喚能属文者数人。賦落花無数雪」という行幸の記録がある。

凡樹見無同。凡樹 同じき無きを見る  
 折欲妨人鎖、折らむとせば 人を鎖もて妨げむと欲す  
 含應禁鳥籠。含まむとせば 応に鳥を籠に禁ずべし  
 此花嫌早落、此の花早く落つることを嫌ふ  
 争奈路春風。争奈む 春風に賂ふことを

(54・惜<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>)

ここでまず注目すべきなのは、「国香」という語である。「以蘭有国香、人服媚之如是（蘭に国香有るを以て、人之に服媚すること是の如くならん）」(『春秋左氏伝』卷二十一・宣公三年)とあるように、中国の漢詩文における「国香」は普通蘭の香を指す。それに対して、忠臣詩における「国香」は桜の香りをいう。桜を日本国中で最も優れた花と位置づけ、その香りがほかの植物（勿論「蘭」を含む）と違って国を代表する香りであるという意を表す「国香」は、当詩の基底にあった国風意識を露わにしているものと言えよう<sup>7</sup>。ちなみに、忠臣の弟子であり婿である菅原道真の「春、惜<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>製一首」に「桃李慙顔共遇時（桃李顔は慙づ 共に時に遇へることを）」(『菅家文章』384)という詩句が見える。中国の桃李の漢詩表現が桜花詩に大きな影響を及ぼしたにもかかわらず、道真は桃李に対する『万葉集』以来和歌の世界で日本人になじみの深い桜の優位性を強く主張しているのである。

忠臣詩の尾聯は〈桜の花は早く散るのがまことに残念だ。春風に贈物をして、花を散らすのをやめさせたい〉という意味である。また、二首目の漢詩は、

(前略)

縦令先折終先落、縦令ひ先づ折れて 終に先づ落つとも  
 応放光陰少選貪。応に光陰を放つべし 少選は貪らむ

(196・桜花欲<sub>レ</sub>發、同勒<sub>二</sub>含・堪・酣・貪<sub>一</sub>)

〈たとえ咲いたそばから花が折れ、またついには早々に散ってしまうとしても、それまでのわずかな間、桜の盛りを堪能しよう〉という。中国の桜花詩において、散る桜花を詠んだものは極めて少ない。『全唐詩』では9首しか見られない。「昨日小楼微雨過、桜桃花落晚風晴」(中唐・殷堯藩・游<sub>二</sub>山南寺<sub>一</sub>二首)、「桜桃零落紅桃媚、更俟<sub>二</sub>旬餘<sub>一</sub>共醉看」(晚唐・韓偓・再和)は舞い散る桜花の風情を詠んでいるが、和歌に頻出する桜がぱっと咲いてぱっと散るという用例も見られないし、桜の落花を惜しむ表現もほとんど見当たらない<sup>8</sup>。和歌においては、

7 山本登朗氏は「賂路と和歌と漢詩—島田忠臣の一首—」(新日本古典文学大系(月報51)岩波書店、1994年2月、5頁)で「中国の詩には見られない桜を、中国ならぬ日本の最高の花として称えるこの用語(筆者注:「国香」)の背後には、中国詩の模倣にとどまらず、日本人独自の世界をめざそうとする忠臣の志向が見え隠れする」と述べる。

8 散る桜を惜しむ中国詩は、晚唐韋莊の『桜桃樹』「而今花遊避蜂去、空作主人惆悵詩」の一首しか見出せない。なお、笹川勲氏は「菅原道真の桜花詠—寛平期宇多朝における『菅家文章』卷五・三・八四番詩の位相—」(国学院大学紀要 50、2012年2月、99頁)において散る桜花によって嘆老を象徴させる白居易の詠法が日本文学に大きな影響を与えたと指摘しているが、『白氏文集』「紅桜満眼日、白髮半頭時」(0917 桜桃花下嘆白髮)「桜桃昨夜開如雪、鬢髮今年白如霜」(1125 感桜桃花因招飲客)が端的に示すように、白詩において人に老いを意識させるのは散る桜ではなく咲き誇る桜である。「引手攀紅桜、紅桜落似霰」(0544 花下対酒二首)における桜は枝をよじることによって散ったのである。

詠<sub>レ</sub>花

春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも

(『万葉集』 卷十・1870・作者不明)

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

(『古今集』 卷二・春下・69・読人知らず)

さくらのごとく散る物はなし、と人のいひければよめる

桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ

(『古今集』 卷二・春下・83・貫之)

桜花けふこそかくもにほふともあな頼みがた明日の夜のこと

(『伊勢物語』 第九十段)

とあるように、多く詠まれている。つまり、忠臣詩は桜花歌の独特な表現を取り入れることによって、伝統的な中国詩から外れてしまうのである。

菅原道真撰と伝えられる『新撰万葉集』(893)は、それぞれの和歌に一首の七言絶句の漢詩を配している。上春12の漢詩は、桜花が早く咲いて香りも残さずにすぐに散ってしまうことを詠んでいる。

上春12 鶯はむべも鳴くらむ花桜咲くと見しまにかつ散りにけり

誰道春天日此長、誰か道ふ春天 日此れ長しと

桜花早綻不留香。桜花早く綻び 香を留めず

高低鶯囀林頭聒、高く低く鶯囀り 林頭 聒し

恨使良辰独有量。恨むらくは良辰をして 独り有量ならしむることを

承句の「桜花早綻不留香」は先行する和歌の「花桜咲くと見しまにかつ散りにけり」の翻案であり、中国詩の正格から外れた表現と見ることができる。「桜の短い盛り」という和歌の表現は、宇多朝の漢詩に継承されている。また、結句「恨使良辰独有量」と見えるように、開花期が短くすぐに散る桜は、人々から限りなく愛惜されるものとして詠まれている。こうした発想は九世紀末の桜花詩に多く見られる。例えば、

此花嫌<sub>レ</sub>早落<sub>レ</sub>、争奈路<sub>レ</sub>春風<sub>レ</sub>。

(『田氏家集』 54・惜<sub>レ</sub>桜花<sub>レ</sub>)

何因苦惜花零落、

為<sub>三</sub>是微臣身職<sub>レ</sub>拾遺<sub>レ</sub>。

(『菅家文章』 384 春、惜<sub>レ</sub>桜花<sub>レ</sub>、応<sub>レ</sub>製一首)

残嵐輕簸千勻散、自<sub>レ</sub>此桜花傷<sub>レ</sub>客情<sub>レ</sub>。

(『新撰万葉集』 上春3)

というように、散り乱れる桜の花が、人の心を悲しませるのである。その背後には、万葉以来の散りゆく桜を惜しむ歌の影響が考えられよう。

## 2.2. 桜花と春風

前掲の忠臣詩には、花を散らさないように、春風に贈り物をしたいという表現がある。これも中国の桜花詩にはない、和歌独特の発想と見ることができる。

此花嫌早落、此の花早く落つることを嫌ふ  
 争奈<sup>いかなせ</sup>賂<sup>まひな</sup>春風。争奈む 春風に賂ふことを

(『田氏家集』54・惜<sub>二</sub>桜花<sub>一</sub>)

「争奈む春風に賂ふことを」という趣向は、

① 左大臣橘卿宴<sub>二</sub>右大辨丹比国人真人之宅<sub>一</sub>歌三首

我が屋戸に咲けるなでしこ幣はせむゆめ花散らないやをちに咲け

(『万葉集』巻二十・4446・丹比国人)

② 春三月諸卿大夫等下<sub>二</sub>難波<sub>一</sub>時歌二首

わが行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめ此の花を風にな散らし

(『万葉集』巻九・1748・高橋虫麻呂)

といった歌を想起させる。山本登朗氏は風のような自然物に物を贈って何かを依頼しようという発想は、中国詩には容易に見られず、和歌の世界にあってはごく一般的に見られると指摘する(山本1994)。例えば、〈私の庭に咲いている撫子の花よ、贈物をしよう。決して散らないで何度も咲いてくれ〉という①の歌には、撫子の花に贈物を送りたいという表現がみえる。また、②の歌では、高橋虫麻呂は風の神様である龍田彦に桜を散らさないでくださいと、頼んでいる<sup>9</sup>。古今集歌はこの古来の趣向を受け継ぎながら、

③吹く風にあつらへつくる物ならばこのひともとはよきよといはまし

(『古今集』巻二・春下・99・読人知らず)

④ さくらの花の散り侍りけるを見てよみける

花散らす風のやどりはたれかする我にをしへよ行きてうらみむ

(『古今集』巻二・春下・76・素性)

とあるように、一層の知巧性を加えている。③は吹く風に注文をつけることができるならば、せめてこの一本だけでも避けてほしい、と春風に散る花を惜しむ情を表す。④は〈花を散らす風が泊まっているところを誰か知っているだろうか、私に教えてくれよ、行って恨み言を言おう〉という内容となる。忠臣の「争奈む春風に賂ふことを」と同工の発想をもっている<sup>10</sup>。

9 齊藤充博氏が「まひはせむ:古代の賂小考」(三田国文12,1989年12月,7頁)で詳しく考察したように、『万葉集』において、「玉の道の神たちまひはせむ我が思ふ君をなつかしみせよ」(巻十七・4009・大伴池主)のごとく、旅の無事を確保するため、路次の神に対して何らかの物を捧げることが多く詠まれている。また、ほととぎす(巻九・1755)、月(巻六・985)等の景物に対して物を贈って願いを聞いてもらおうと詠った歌もある。忠臣詩の「争奈賂春風」はこの流れを汲んだものと思われる。

10 金原理氏は『詩歌の表現 平安朝韻文攷』『古今和歌集』の表現構造」(九州大学出版会,2000年1月,20頁)で、忠臣詩と④の古今集歌との類似性を指摘する。

### 2.3. 鶯の宿としての桜

また九世紀末の桜花詠のもう一つの特徴は、鶯の宿として詠まれることにある。次の『新撰万葉集』の漢詩を見てみよう。

上春 17 鶯のわれてはぐくむ桜花思ひぐまなくはやも散るかな  
 紅桜本自作鶯栖、紅桜本自 鶯の栖と作る  
 高翥華間終日啼。高く華間に翥んで 終日啼く  
 独向風前傷幾許、独り風前に 傷むこと幾許ぞ  
 芬芳零処径応迷。芬芳の零つる処 径応に迷ふべし

漢詩起句「紅桜本自鶯の栖と作る」は鶯が桜の花のうちに住んでいる意で、中国詩の「花裏鶯」「鳥栖樹」等の影響下にあるものと思われる。

- ①金谷万株連綺薨、金谷万株 綺薨に連なり  
 梅花密処藏嬌鶯。梅花密なる処 嬌鶯を蔵す  
 (『楽府詩集』卷二十四・隋・江総・梅花落)
- ②只愁花裏鶯饒舌、只だ愁ふ 花の裡の鶯の饒舌すことを  
 飛入宮城報主人。飛んで宮城に入りて 主人に報せる  
 (『白氏文集』3308・令公南莊花柳正盛欲<sub>レ</sub>偷<sub>レ</sub>一賞先寄<sub>二</sub>二篇<sub>一</sub>)
- ③管絃聲裏啼求友、管絃の声の裏 啼きて友を求む  
 羅綺花間入得群。羅綺の花の間 入りて群を得たり  
 (『菅家文草』453・早春内宴、侍<sub>二</sub>清凉殿<sub>一</sub>同賦<sub>二</sub>鶯出谷<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>製)

①の楽府詩「梅花落」が大伴旅人の梅花の宴の歌に影響を与えたことは、先行研究が指摘するところである<sup>11</sup>。また、「梅花落」の詩題及びその表現は『文華秀麗集』（楽府・67・嵯峨天皇・梅花落）の漢詩にそのまま撰取され、さらに古今集歌にまで大きな影響を及ぼすことになる（小島 1970）<sup>12</sup>。ゆえに、上春 17 の「紅桜本自鶯の栖と作る」は①の「梅花密なる処嬌鶯を蔵す」を踏まえたことが十分に考えられる。しかし、①「梅花密処」と②「花裏鶯」と③「花間入得群」から分かるように、鶯は梅の花のうちに身を隠しているが、花を巣とするわけではない。鳥の巣については、次のような詩に詠まれている。

11 天平二年(730)正月、大宰帥である大伴旅人の官邸では、梅花の宴が開かれた。辰巳正明氏は『万葉集と中国文学』第四章「落梅の篇—楽府「梅花落」と大宰府梅花の宴」（笠間書院、1987年2月）において、梅花の宴の漢文序の末尾にいう「請紀落梅之篇」は楽府「梅花落」との関連を示唆するものであると指摘する。

12 小島憲之氏は「古今集の表現の成立」（国文学：解釈と鑑賞 431、1970年2月、33頁）において、嵯峨天皇の「梅花落」「<sub>レ</sub>鳴梅院暖、花落舞春風。歴乱飄鋪地、徘徊颯満空。狂香燠枕席、散影度房檐。欲驗傷離苦、応聞羌笛中」と、『古今集』の「散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる」（卷一・春上・47・寛平御時后宮歌合のうた・素性法師）「梅が香りを袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし」（卷一・春上・46・寛平御時后宮歌合のうた・説人知らず）を取り上げ、そこには隋の江総の梅花落の如き詩的世界が描かれると指摘する。

霜草欲枯虫思急、霜草枯れんとして 虫の思むること急にして

風枝未定鳥栖難。風枝未だ定まらずして 鳥の栖むこと難し

(『白氏文集』3287・答<sub>二</sub>夢得秋庭独坐見贈<sub>一</sub>・〈『千載佳句』四時部所収〉)

鳥栖紅葉樹、鳥 紅葉の樹に栖む

月照青苔地。月 青苔の地に照る

(『白氏文集』0752・秋思〈傍線部は『千里集』51番の句題〉)

山鳥愁傷構巢樹、山鳥は 巢を構へし樹を傷けむことを愁へ

野人畏着編宇蓬。野人は 宇を編みし蓬に着かむことを畏る

(『文華秀麗集』雑詠・141・巨勢識人・和<sub>下</sub>滋内史奉<sub>レ</sub>使遠行觀<sub>二</sub>野燒<sub>一</sub>之作<sub>上</sub>)

閑計新巢紅樹近、閑に新しき巢を計れば 紅樹近し

苦思旧谷白雲除。苦に旧の谷を思へば 白雲除なり

(『菅家文章』433・詩友會飲、同賦<sub>三</sub>鶯聲誘引來<sub>二</sub>花下<sub>一</sub>)

これらの傍線を施した句から明らかなように、その巢は花でなく樹木である。『文華秀麗集』『菅家文章』の二例からみれば、鳥が木の枯れ枝や枯れ葉を利用して巢作りをする表現は平安漢詩人によく知られていたと言える。一方、『菅家文章』では、「花裏鶯」「鳥栖樹」の両方を融合して、中国詩にはない表現が作り出される。

①春風便逐問頭生、春風 便ち逐ひて頭生を問ふ  
爲<sub>レ</sub>翫梅粧繞樹迎。爲<sub>レ</sub>に梅粧を翫び 樹を繞して迎ふ

(中略)

裂素誰容勞少女、素を裂きて誰か容さむ 少女を勞めしむることを  
占巢莫怪妬初鶯。巢を占めて怪しふこと莫 初鶯を妬むことを

(『菅家文章』67・早春、陪<sub>二</sub>右丞相東齋<sub>一</sub>、同賦<sub>二</sub>東風粧梅<sub>一</sub>)

②語偷絃管韻、語は 絃管の韻きを偷む  
棲<sub>レ</sub>綺羅花。棲は 綺羅の花をトめたり

(『菅家文章』83・早春、侍<sub>二</sub>内宴<sub>一</sub>、賦<sub>レ</sub>聽<sub>二</sub>早鶯<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>製)

③驚看麝劑添春沢、驚き看る 麝劑の春沢に添ふことを  
勞問鶯兒失晚巢。勞ひ問ふ 鶯兒の晚巢を失ふことを

(『菅家文章』85・早春、侍<sub>二</sub>内宴<sub>一</sub>、同賦<sub>二</sub>雨中花<sub>一</sub>)

④ 内より、人の家に侍りける紅梅をほらせ給けるに、鶯のすくひて侍ければ、  
家のあるじの女、まづかくそうせさせ侍ける  
勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

(『拾遺集』卷九・雜下・531・読人知らず)

①の傍線部は「春風は鶯が美しい梅の花の中に巢を独り占めしているのを妬く」という意である。②は「鶯のすみかはうすぎぬのように美しい花の中に構えている」と詠んでいる。③は「花が雨に洗われて散ってしまうならば、鶯の泊るべき巢がなくなる」という意を表す。

いずれも鶯が花に住んでいるという発想に基づいたものである。つまり、道真は中国詩に詠まれる鶯の隠れている花畑を「鶯の巢」と解して、新たな表現を作り上げているのである。なお、郭公が花橋に泊っていることは『万葉集』以来よく詠まれる。

詠\_霍公鳥\_一首

鶯の生卵の中にほととぎす独り生れて... 我が屋戸の花橋に住み渡れ鳥

(『万葉集』 卷九・1755・高橋虫麻呂)

けさきなきいまだたびなる郭公花橋に宿はからなん

(『古今集』 卷三・夏・141・読人知らず)

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

やどりせし花橋もかれなくになど郭公こゑたえぬらん

(『古今集』 卷三・夏・155・大江千里)

これらの歌は「花が鳥の宿である」という表現の発達の素地となっているものと思われる。①における「梅粧」から明らかなように、「鶯の宿」は梅の花をいう。中国詩にせよ、和歌にせよ、「鶯・梅」の組合せは「鶯・桜」より遥かに多い。そのためか、②と③の「花」は梅の花である可能性が説かれる<sup>13</sup>。④の和歌における「紅梅」は「鶯の宿」と見なされる。

中国詩の「梅花の中の鶯」から道真詩の「鶯の宿としての梅花」へ変容を遂げ、さらに『新撰万葉集』上春 17 の漢詩の「鶯の宿としての桜花」へと変化していく。「鶯」と「桜」が結びつく例としては、

霞立つ春の山辺に桜花あかず散るとや鶯の鳴く

(寛平御時后宮歌合・25・作者未詳)

鶯はむべも鳴くらむ花桜さくと見しまにかつ散りにけり

(『新撰万葉集』 上春 12・作者未詳)

鶯のわれてはぐくむ桜花思ひぐまなくはやも散るかな

(『新撰万葉集』 上春 17・作者未詳)

などがある<sup>14</sup>。また、「鶯の宿としての桜の花」という発想は次の和歌に見出すことができる。

鶯のすみかの花や散りぬらむわびしき声にをりはへて鳴く

(『新撰万葉集』 上春 20・作者未詳)

『新撰万葉集』上春 20 の「花」の種類ははっきり示されていないが、上巻春部のこれまでの

13 川口久雄氏は『菅家文章・菅家後集』(日本古典文学大系 72、岩波書店、1966 年 10 月、172~174 頁)で②③の「花」を「梅の花」と理解している。

14 中国詩では、「梅」と「鶯」とともに詠まれた場合が多い。「鶯・桜」の組み合わせは、『全唐詩』には「凝艶折時初照日、落英頻処乍聞鶯」(中唐・李紳・北楼桜桃花)「流鶯春曉喚桜桃、花外伝呼殿影高」(中唐・陳去疾・春宮曲)と二例が見える。

歌の配列からみれば、桜を表す可能性が大きい(半沢・津田2015)<sup>15</sup>。上春17の漢詩の「紅桜本自鶯の栖と作る」という発想は、和歌の世界に求めることができる。

上の分析により、上春17の「紅桜本自作鶯栖」は「鶯の宿としての桜の花」「郭公の宿としての花橘」などの和歌表現を踏まえて作り出されたものと考えて間違いなからう。

### 3. おわりに

九世紀前半までの桜花詩の表現や発想はほとんど六朝・初唐詩に倣ったもので、日本の桜の特性を表現し得ていない。それに対して、島田忠臣と菅原道真是桜という伝統的な歌材を漢詩の上に表現しながら、中国詩の「梅・桃・李・蘭」に対する「桜」の優位性を唱える。こうした試みを行った背景には、桜を日本のものとして再認識し、日本漢詩を中国詩に拮抗する地位に立たせようという九世紀末の詩人たちの国風意識があるのである。九世紀末の桜花詩に「早く散る桜を惜しむ」「桜を散らさないように春風に贈り物をしたい」「鶯が桜を巣とする」など和歌的表現が多く用いられるという事実は、漢詩文の勢力に抛りつつ、和歌が次第に公的地位を獲得していくという文学史的動向を物語っている。中国詩への接近・同化の中で、和歌と日本漢詩を権威づけようという対抗意識が少しずつ芽生えてきたが、それは決して中国詩そのものを否定しようとしたわけではない。例えば、桜の漢詩表現は、中国より伝わってきた「梅・桃・李・蘭」の表現を承けて作られたものである。このような高度な文化の蓄積が十分にあったからこそ、国風文化の展開が可能になったのであろう。

---

15 『新撰万葉集』春部において、2番と11番は梅の歌、3番、12番、17番は桜の歌で、残りの歌は「花」と記されている。

## 引用文献

- 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（中）、塙書房、1979年1月、1367頁  
 神谷かをる「色も香りもさくらめど——古今集の「桜」と漢詩文」光華女子大学研究紀要  
 29、1991年12月、24～25頁
- 笹川勲「菅原道真の桜花詠—寛平期宇多朝における『菅家文章』巻五・三八四番詩の位相—」  
 国学院大学紀要50、2012年2月、99頁
- 山田孝雄「花の宴」『桜史』桜書房、1941年5月、32頁
- 後藤昭雄「古今集時代の詩と歌」国語と国文学60-5、1983年5月、50頁
- 市川桃子「補説（一）桜桃 描写表現の変遷—盛唐から中唐へ—」『中国古典詩における植  
 物描写の研究—蓮の文化史』汲古書院、2007年2月
- 山本登朗「賄賂と和歌と漢詩—島田忠臣の一首—」新日本古典文学大系（月報51）岩波書店、  
 1994年2月、5頁
- 齊藤充博「まひはせむ：古代の賂小考」三田国文12、1989年12月、7頁
- 小島憲之「古今集的表现の成立」国文学：解釈と鑑賞431、1970年2月、33頁
- 半沢幹一・津田潔『対訳新撰万葉集』勉誠出版、2015年2月、160頁  
 『文選』上海古籍出版社、1986年6月  
 『初学記』中華書局、2004年2月  
 『芸文類聚』上海古籍出版社、1999年5月  
 『全唐詩』中華書局、1960年4月
- 平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』同友社、1989年10月  
 『景印文淵閣四庫全書』（經部・春秋類・春秋左伝注疏・卷二十一）台湾商務印書館、  
 1986年
- 『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系69、岩波書店、1964年6月  
 『田氏家集注』和泉書院、1991年2月～1994年2月  
 『菅家文章・菅家後集』日本古典文学大系72、岩波書店、1966年10月  
 新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』和泉書院、2005年2月  
 『万葉集』日本古典文学大系4～7、岩波書店、1957年6月～1962年5月  
 『古今和歌集』日本古典文学大系8、岩波書店、1958年3月  
 『伊勢物語』新日本古典文学大系17、岩波書店、1997年1月  
 『古事談・続古事談』新日本古典文学大系41、岩波書店、2005年11月  
 『本朝一人一首』新日本古典文学大系63、1994年2月

## 付記

本研究は、公益財団法人博報児童教育振興会の助成を受けて行われた。

## Kanshi of the Cherry blossom around the end of the 9th century

Qing LIANG (Amoy University/Hakuho Foundation Japanese Research Fellow)

【Keywords】 Waka, Japanese Kanshi, Chinese Kanshi, cherry blossom

Since ancient times, cherry blossoms as a symbol of spring have been inseparable from Japanese life, and repeatedly used in various literary works. Take the Japanese Kanshi as an example, the cherry blossoms appeared very early in such poetry as *Kaihuso* and *Tyokusensansyu*, but most of it simply copied the poems about peach, plum and pear blossoms of the Six Dynasties (222-589) and early Tang Dynasty (618-907), without highlighting the features of the cherry blossoms. It was not until the end of the 9th Century that Shimada Tadaomi and Sugawara Michizane, representatives of Japanese poets, started to realize the uniqueness of their local culture. Instead of imitating Chinese poetry, they created cherry blossom poems with Japanese characteristics by combining Waka and Japanese Kanshi.